

J. Jpn. Bot. 86: 170–188 (2011)

日本近代植物学黎明期における日仏協働の実相—リュドヴィク・サヴァティエの遺産から（西野嘉章^{a,*}, Christian POLAK^b）

Yoshiaki NISHINO^{a,*} and Christian POLAK^b: Real Phases of Franco-Japanese Collaborations in the Dawn of Modern Japanese Botany

^a東京大学総合研究博物館 113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

^bフランス社会科学高等研究院日本研究所 102-0083 東京都千代田区麹町 4-5 KS ビル 8F, 株式会社セリク

^aThe University Museum, the University of Tokyo, 7-3-1, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0033 JAPAN;

^bEHESP Paris (Centre de Recherches sur le Japon de l'Ecole des Hautes en Sciences Sociales), K.K. SERIC, KS Bldg. 8 Fl., 4-5, Kôji-machi, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-0083 JAPAN

*Corresponding author: nishino@um.u-tokyo.ac.jp

Summary: Ludovic Savatier, a naval doctor employed in Yokosuka Arsenal, active from the end of the Edo Era to the beginning of the Meiji Era, contributed to the development of Modern Japanese Botany, but his activities as a botanist have not been well established. The 221 personal letters mostly addressed to his Parisian collaborator Adrian Franchet, not published until now, clarify diverse unknown facts: he was interested not only in botany but also in natural history; he operated in his own house an experimental garden of acclimatization of occidental plants; he made close relationships with some Japanese botanists, Keisuke Ito, Yoshio Tanaka and Yoshimoto Ono and, with their help, realized in 1875 a publication of the collaborative works with A. Franchet, *Enumeratio Plantarum in Japonia*. We newly confirmed in the former library of Savatier an existing of the first volume of *Enumeratio* dedicated, dated and annotated by hands of K. Ito who contests exchanges of scientific knowledge in Botany between East and West.

幕末から明治初頭にかけて、日本で活動したフランス人博物学者リュドヴィク・ポール・アメデ・サヴァティエ (Fig. 1) (1830–1891) に関しては、『植物研究雑誌』に発表された今井忠宗の「植物家佛醫サヴァチエ氏の事跡（および補遺）」（今井 1917, 1920）をもって嚆矢とするが、その後、詳しい研究がなされることなく、漸く近年になって、植物学史研究の観点から、大場秀章氏がいくつかの論考を著したというに過ぎない（大場 1996, 2000）。そのため、このフランス人が伊藤圭介（1803–1901）、田中芳男（1838–1916）、小野職慈（1838–1890）らと関わりをもっていたことまでは

知られるものの、彼等日本人学究たちとの関わりはどのようなものであったのか、その詳細については解明されぬままにされてきた。サヴァティエがパリ自然史博物館植物標本部長アドリアン・ルネ・フランシェ（1834–1900）とともに著した大著 *Enumeratio Plantarum*（日本産植物目録）全 2 巻に、日本産植物の和名がどのような過程を経て採録されるに至ったのか。あるいはまた、田中芳男や伊藤圭介の著作にラテン語洋名が採録されるにあたって、サヴァティエの協力があったとされるが、それはどのような関わりのなかで実現したのか、問われるべき点は多々ある。

日本の近代植物学史の端緒を飾る、かくも重要な事実が未解明のままになっていたのはなぜか、理由は明白である。サヴァティエに関わる仏語史資料の究明がなされずにあったからである。そうした学史研究の前件を踏まえ、われわれは 2009 年日仏修好通商条約締結 150 周年記念特別展示『維新とフランス — 日仏学術交流の黎明』を組織するにあたり、母国フランスにあって、いまだ公にされる機会のなかったサヴァティエ関連史資料の発掘に力を注ぎ、近代植物学の黎明期の実相を展覧会図録のなかで明らかにすることができた（西野・ポラック 2009）。

日本における展覧会の開催とフランス語での図録の公刊は、幸いなことに、日仏両国の関係者を少なからず刺激することになった。リュドヴィク・サヴァティエについては、これまで、孫のジャン・ラウルが 1938 年 5 月発行の雑誌『ルヴュ・マリタイム』に寄稿した記事「在日フランス人 —



Fig. 1. Portrait of Ludovic Savatier (Studio DELPHIN, Rochefort).

横須賀造船所の創設」のなかに紹介した書簡抜粋が知られるのみで、履歴や業績について詳しい紹介がなされていたわけではない (Raoulx 1938). そのこともあり、上記の展覧会を組織するにあたって、われわれはオレロン島出身のリュドヴィックの子孫ミシェル・サヴァティエ氏の許に残されて

いる私的な遺品を調査し、ジャン・ラウールの手稿をはじめとする史資料、リュドヴィックが第一次日本滞在中 (1863–1864) に家族へ宛てて送った私信の筆写資料、第二次日本滞在中 (1865–1876) にパリのフランシェへ宛てて送った書簡 221 通の存在を確認し、リュドヴィックの日本における活動

について多くの新事実を明らかにすることができた。加えて、海軍史料館（現フランス共和国国防史料館）に残されている、軍医リュドヴィク・サヴァティエの個人功績録を確認し、戸籍と軍歴に関する基本情報も得ることができた⁽¹⁾。

展覧会が終わってからも、サヴァティエに関する新資料の発掘、新事実の発見が続いている。たとえば、サヴァティエ旧蔵の『ユリ図譜』は、国立国会図書館蔵品として知られていたユリ図譜の原本であり、馬場大助の手になるものであることが判明した。そればかりか、ミシェル・サヴァティエ氏がリュドヴィク旧蔵資料体を基に、『オレロンの紅撫子と日本の白百合 — 海軍医と植物学者のサヴァティエ一族』を出版し、日仏交流に果たした役割について、あらためて注意を喚起したところでもある (Savatie 2010)。日本の植物学研究者との興味深い事実を明らかにする新資料の発見を機に、ここで今一度、近代植物学に対する仏人サヴァティエの寄与の内容を振り返っておくことも、あながち無駄ではなかろうと考えるに至った。

日本と博物学者サヴァティエ

徳川幕府は第二代フランス総領事兼全権公使レオン・ロッシュ (1809–1900) の進言を承け、造船技師フランソワ・レオンス・ヴェルニー (1837–1908) を迎え、1865 (慶応元) 年に横須賀製鉄所を起工、1871 (明治4) 年に官営造船所を完成させている。製鉄所を立案したヴェルニーは、建設に要する技術者、機器、材料を整えるため一時帰国するが、そのさいロッシュフォール造船所で海軍一等医官の職にあったリュドヴィク・サヴァティエに眼をとめ、日本への赴任を求めた。サヴァティエは妻と長女ならびに召使3人を伴い、1865 (慶応元) 年、二度目の来日を果たし、同年10月14日に「医官」として横須賀造船所の正式雇入となった⁽²⁾。

1863 (文久3) 年初めて日本の地を訪れたサヴァティエは、5月19日付の両親宛の書簡のなかで、初めて眼にする日本について次のように書いている、「いままで見た国のなかで、美しさという点で、もっとも嬉しい驚きを与えてくれる国であることは間違いありません。とにかく山の多い国です。草木が生い茂り、絵のように美しい丘が、海辺まで迫っています。田舎はどこも耕作が行き届いています。草花が見事に咲き誇っています。ユリ、

ツバキ、アジサイは実に美しく、他にもありとあらゆる植物が生えています。が、時間もなく、まだ調べはついていません。(中略) ここにはまだ中国にもない果実がたくさんあります。ナシ、アンズ、モモ、キイチゴなど、です。と言ってもあまり美味しくなく、どれもヨーロッパで栽培されたものより品質が劣ります」。同じく両親宛の6月26日付書簡には、横浜郊外の自然相に関する記述が見られる、「田舎は魅力的で、よく出かけますが、歩き回れる範囲は、僅かな半径内に限られています。植物をいくつか採集したあと、昆虫の、とてもきれいなものを手に入れました。田舎ほど趣きがあり、優美で、変化に富む場所はありません。いたるところに実り豊かな谷があり、マツ、モミ、クリ、スギなどの美しい木々に覆われた丘があります。こんこんと流れ出る湧水、緑の草むら、あまたの木蔭。百姓たちはとても愛想がよく、どの農家も我々を招き入れ、お茶やサケ (米のワイン) をふるまってくれます」。

およそ半年に及ぶ、この第一次日本滞在では、6月初めの「下関戦争」に加わるようになったサヴァティエであるが、その傍らで虫や貝の採集にも熱を上げていたようである。このことはフランスの家族に宛てた書簡のなかに語られている。それらの標本の収めてあった箱が長州藩の砲台からの砲撃で粉碎されてしまったことを大いに悔やんでいたのである。1863 (文久3) 年7月11日付両親宛書簡には、「あいかわらず昆虫を求めて、田舎を駆けずり回っています。郊外の丘陵はあまりに美しく、それを覆う見事な木々の下で何時間過ごしても、飽きることがありません」。

サヴァティエは、本業こそ医師であったが、動物、鉱物、植物、地質など、好奇心旺盛な博物学者でもあり、それが日仏学術交流に大きく寄与することになった。1865 (慶応元) 年に始まり、以後10年余りに及ぶ第二次日本滞在中、旧知のフランシェと定期的に文通を行っている⁽³⁾。パリ自然史博物館に残されている221通の書簡から、リュドヴィク・サヴァティエの、海軍医としての、また博物学者としての、二重生活を詳しく知ることができる。

一通目の書簡には1866 (慶応2) 年10月12日の日付がある、「こちらでは博物学に手をつけたばかりです。植物標本はまだ始めておりません。ですから、すぐに取り掛かることにします。冬のあいだに為すべきことが山ほどあります。わたし

たちのいる海岸には、沢山の貝がありそうなので、これにも取り組むつもりです」。日本在住の仏人軍医の博物学的知識と収集能力に関心をもったパリ国立自然史博物館は、もっと調査研究の範囲を拡げ、化石でも貝殻でも、面白そうなもの、ヨーロッパで知られていないものが見つかったら、なんでも送って欲しいと依頼している⁽⁴⁾。そこには、ポンスの聖職者学校でともに学んだ、6歳年上の従兄アレクサンドル・サヴァティエ (1824–1886) の感化があったと言われるが、若くして博物学的好奇心の塊であった海軍医は、村上伯英、石井宗順らを、あるいは通訳として、あるいは助手として雇い、軍務の合間を使って、まずは横須賀で、次に行動の自由が認められていた三浦半島の各地で、さらには近接する鎌倉や横浜で、植物、化石、鉱物の採集をおこなっている。上記の書簡には、横須賀の製鉄所の建設予定地で、地中から掘り出されたものについての記述も見出される、「地質学に関しては、すっかり当惑しております。日本の海岸の初期調査を基に、といっても実に底の浅いものですが、海岸の地盤は花崗岩質だろうと思っていました。しかし、出てくるのは粘土質の岩ばかりでした。もっか、製鉄所を造るため、山を二つ切り崩しております。そのうちのひとつは、高さが30メートル以上あります。二つの山はいずれも海に面しており、出てくるのは粘土層ばかりです。(中略) 深さはいろいろですが、木の幹や枝が見つかります。すぐに崩れてしまいますから、保存するのは簡単ではありません。上手くいっても、空気に触れると、硬くなります。とはいえ、バクに似た動物の頭部1点と、長さ7、8メートルになろうかという脊柱の断片1点、肩甲骨1点、腰椎1点、見事なシカの角1点を採集しました」。レオンス・ヴェルニーの遺族ジャン・ヴェルニー氏の許に残された写真帖から、同博物館に送られたもののなかに、ゾウのそれに類する大型動物の化石骨のあったことが確認されており、造船所建設で山を削るさいに見つかった動物化石の収集にも余念のなかったことが判る⁽⁵⁾。

博物学者サヴァティエの収集対象には、当然のことながら、植物も含まれていた。外国人ということで行動を制限されていたこともあるが、横須賀の現場に材木技師として着任してきたアドルフ・フランソワ・ウジェーヌ・デュボン (1840–1907) とその助手の佐波一郎、木村佐助、さらには後述の伊藤圭介、田中芳男、須川長

之助、あるいはドイツ人植物採集家カール・クラマー (1843–1882) ら、友人や知り合いの助けを借り、多くの日本産植物を収集している。パリの自然史博物館には、フランシェらの手で記載・分類・整理された「サヴァティエ標本」が残されている。1871 (明治4) 年の一時帰国のさい、サヴァティエが手荷物でフランスに持ち帰ったのは、1870 (明治3) 年以降に集められたものであり、それらは前年までに幾度にも分けて送られていた収集品の列に加えられた。フランスにもたらされた日本産植物標本は、最終的に15000点、1800種。それは当時知られていた日本産フローラのほぼ半数に相当する量であった。それらの同定を引き受けたのはフランシェであった。

横須賀の順化園

サヴァティエの功績は標本収集のみに止まらなかった。横須賀の高台に用意された自邸 (Fig. 2) に順化園を造り、ヨーロッパ産植物の日本への順化を試みていたからである⁽⁶⁾。このことはパリとの交信記録から確かめられる。フランシェに頼み、本国から苗木450本を取り寄せ、それらを順化園で育てようとしていたのである。上段で紹介したフランシェ宛の一通目の書簡の終わりには、次のようにある、「周囲はほとんど訪ねていませんが、寒さが到来次第、色々と歩き回って採集してみようと思っています。こちらは庭造りに大忙しです。未開墾の土地しかありませんでしたが、これを順化園にしたいと考えています。立地は申し分ありません。来月にでもヨーロッパから、苗木が2,300本届くことになっており、それを待っています」。1867 (慶応3) 年1月4日付の二通目の書簡からは、冬をもどかしく過ごす、植物学者の心情がはっきりと読み取れる、「春になったら花や昆虫や蝶の採集をしたいと、心待ちにしています。春を待ちながら狩猟に精を出し、庭造りに励んでいます。日本で知られていない樹の苗を450本ほど受け取ったところです。これらにふさわしい場所と土を見つけてやるのは、ひと仕事です」。1867 (慶応3) 年5月11日付の三通目の書簡には最初の収穫が紹介されている、「春になったので、植物を求めて野山を駆け回っています。今年はほとんどすべてを植物学に費やすつもりです。注意深く植物を見て回り、毎日のように収集品を増やしています。いまのところ、我が邦は、草本植物より樹木や灌木の方が豊かです。ヨ

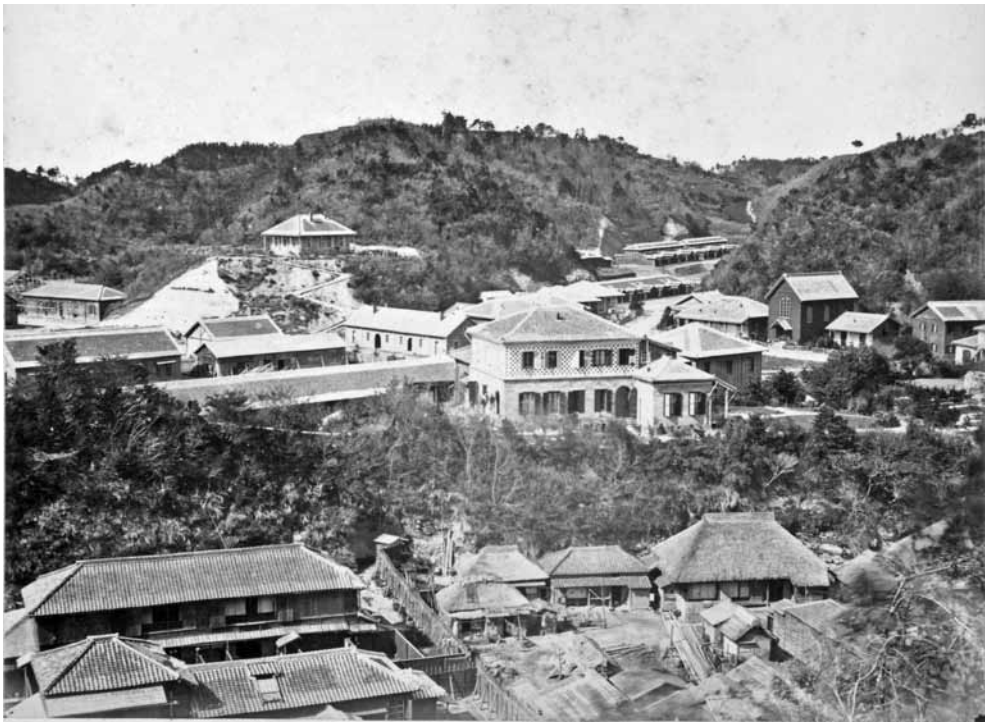


Fig. 2. View of the House of L. Savatier, with botanical garden of acclimatization, Yokosuka.

ヨーロッパでも、すぐに生長しそうな灌木をいくつか見つけましたが、そちらで順化されているのかどうか、わかりません。ランには実に美しいものがあります。ひとつは黄金色、もうひとつは暗い紅色。それに *Cypridium Japonicum*⁽⁷⁾ です。花は一輪咲きで、赤い筋が入り、七面鳥の卵のように丸いかたちをしており、二枚の広い葉の上に垂れ下がっています。葉にはヒダが何本も入っており、ちょうどアンリ四世時代の版画に見られるような、飾り襟のかたちをしています。貴兄は常緑のアオキをご存知でしょうか。(中略) いずれにせよ、花が終わったら、種子と果実を採集したいと思います」。この同じ書簡によると、ヨーロッパから送られてきた苗木 450 本のうち、オリーブ、アーモンド、モモ、ナシ、サクラ、アンズ、スモモは、横須賀の自宅の順化園に適応し、上々の成果を上げていたが、コルクガシについては、苗木 200 本のうち生き残ったのはわずか 2、3 本に過ぎなかったことが判る。

東京に旅したおり、サヴァティエは順化の試みの成果を、「東京の植物園」すなわち小石川植物園で見出している。時代は下るが、1873(明治6)

年 5 月 20 日の書簡にこうある、「幾年か前のことになりますが、彼の地に、フランスのサクラとモモの木を贈っておいたのです。そこでサクランボとモモの果実を見せられました。これは日本で初めて獲れたサクランボです」。果物品種の順化の成功が弾みとなったのだろうが、1874 年 8 月 24 日付フランシェ宛書簡で、野菜のリストを掲げ、それらの種子を大至急送って欲しいと懇願し、2 ヶ月後の 10 月の書簡に、それらを完全な状態で受け取った旨の返信を認めている。スイバ、パセリ、ダイコン各種、チコリ、エスカロール、モクセイソウ、冬物レタス、夏物レタス、チリメンキャベツ、カンタル(アルザス産キャベツ)、テンサイやカブ等の根菜、ブリュッセル産カリフラワー、トルコセロリ、根セロリ、サルシフィ(パラムンジン)、ニンジン、ウォータークレス(オランダガラシ)、ガーデンクレス(コショウソウ)、インゲンマメ、エンドウマメ、マーシュ(ノギシヤ)、ネギ、タマネギ、大粒のイチゴといった野菜が横須賀の順化園で栽培されたのである。イチゴ、サクランボなど順化に成功したものについては、後に果物や野菜の品種として産業化され、結

果として、国内にサヴァティエ由来の食用品種が多く存在することになった。日本産植物相の解明に寄与したフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト (1796–1866) の行わなかったことを、サヴァティエは実践していたのである。

植物標本の収集

植物学者サヴァティエは 1867 (慶応 3) 年 10 月 10 日付フランシェ宛書簡のなかで、収集標本 (含図譜) がすでに 872 種に達していると誇らしげに書いている。しかし、それから 6 ヶ月後の 1868 (明治元) 年 4 月 13 日付書簡では、ロシア人同業者カール・ヨハン・マキシモヴィッチ (1827–1891) と比べ、自分には時間も資金もないと嘆くことになった。「おそらく貴兄は、この報告書を見て、わたしがオランダ人やロシア人と同じ成果を出せずにいることに驚かれるに違いありません。理由はこうです。あの連中ときたら、博物学の研究をするために、こちらに来ているのです。それが彼らのただ一つの仕事なのです。マキシモヴィッチは当地に 4 年間滞在し、政府の費用で (外国人に) 開放された地域を片端から踏査していますが、ロシアのあらゆる代理人から、支援や後ろ盾を得ていたのです。ところが我々のような、哀れなフランス人ときたら、博物学のことでも話そうものなら、鼻で笑われ、頭がおかしいと思われるだけです。手助けなど、これっぽっちもありません。嘆かわしい限りです。でもご安心下さい。わたしには、苦勞も、勉強も、良い仕事をしたいという意欲も、欠けてはおりません。たった独りで作業をするのですから。貴兄はわたしがすべての時間を研究や準備に費やしているに違いないとお考えでしょう。一日に 5 時間や、6 時間では、話になりません。おわかりでしょうか、かくも広大な調査現場の只中にいながら、まだほんの少ししか調べがついていない。そのことに、激しい苛立ちさえ感じる始末なのです」。

もちろん、日本人本草学者と学術的な交流を図りたいとの思いがなかったわけではない。しかし、すぐには思うようにならなかった。1868 (明治元) 年 4 月 13 日付書簡には、「声を掛けた人たちは、他の人に対してはともかく、わたしにだけは、いつも絶望的な慣性力で抵抗し、交換でも有償でも、取引はなにひとつ実現しておりません」とあるからである。日本人との交流が軌道に乗るまでのあいだ、サヴァティエはフランシェから依頼された

件を叶えるべく、日本の植物学に関する基本的な書籍の収集と植物画の製作をおこなっている。同じ書簡には、様々な政治的事件に邪魔され、「シーボルトが日本でもっとも植物の豊かな地方と称した箱根の山々を巡る 2 週間の旅」に出られなくなったとあり、その期間にも、花や植物の図譜 300 枚に彩色を賦し、無彩色の素描 700 点を描き、それらを和本として約 30 冊に纏め、一部を自分の手許に置き、残りをバリーに発送していたことが判る。

第 3 代駐日フランス公使マクシム・ウートレイ、その首席秘書ド・モンテペロと、良好な関係を結んでいたことが 1868 (明治元) 年 10 月 15 日付の書簡から判る。後者には多少なりと博物学の心得があった。そのため、フランス公使館が新設された江戸にあってド・モンテペロは本草学書の収集に協力してくれることになったという。フランス語が堪能で、親仏派と目されていた駐日プロシア公使マックス・フォン・ブランツ (1835–1920) とも親交を結び、ドイツ人博物学者を紹介されている。彼らもまた内地の旅で収集した標本の数々をサヴァティエにもたらすことになった⁽⁸⁾。

1870 (明治 3) 年 6 月初め、サヴァティエは念願の箱根への採集旅行を実現している。しかし、そのときには、許された日程が 4 日間しかなかったため、新種の植物もごくわずかししか持ち帰れなかった。翌年 8 月末の調査の旅は、本格的なものとなった。植物、地質、鉱物の各分野で多くの収穫を得たと 9 月 10 日付の書簡にある。また、植物の愛好家カール・クラマーとの出会いを喜んでいる。「園芸家兼植物学者で 4 年前から日本に住んでいるクラマー氏の訪問を受けました。キエフ植物園からの派遣ですが、2 年もするうちに自分で事業を起こした方が、簡単というよりなにより、その方が収入になることがわかったと言っています。彼は日本の内地を頻繁に旅行していますが、これまでのところ儲けになる品種以外には、ほとんど手をつけておりません。最初はいくらか学術的な収集もしたようですが、ヨーロッパの学会やなにかですでに名のある植物学者に送っても、一向に返事を寄越さない。ということで、すべてのコレクションを脇に放ってあるそうです。彼と一緒に、わたしのコレクションを隅から隅までつぶさに検分しました。その上で彼はこう結論づけたのです。モノに寄せる関心が深く、しかも話のわかる人が見つかったので、さっそく植物標本作り

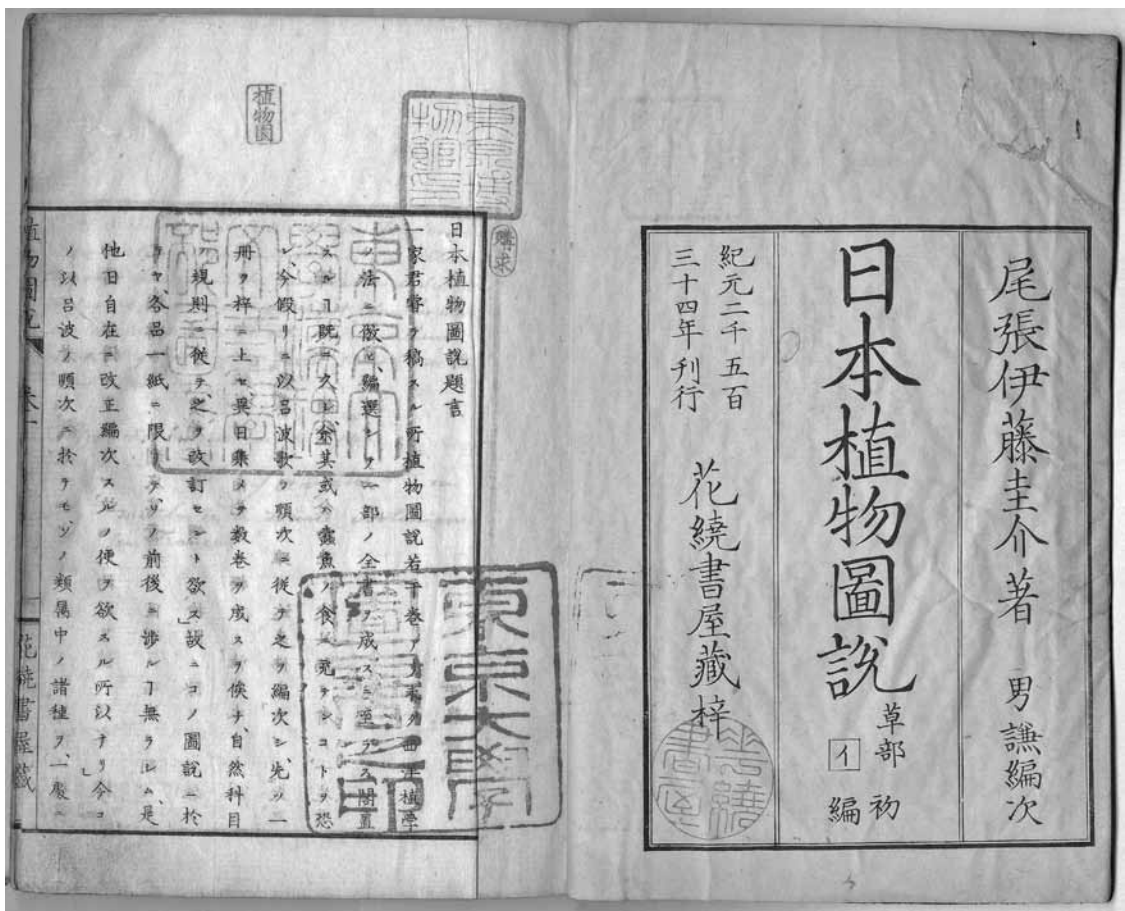


Fig. 3. Title page of Nihon-Shokubutsu-Zusetsu, coll. Koishikawa Botanical Garden, the University of Tokyo.

を再開し、あちこち出歩いている先で面白いものが得られたら、片端から送って差し上げよう、と。彼はさっそくそれに取りかかっています。(中略)一方、朋友のプロシア公使ド・ブラントは、九州と朝鮮沿岸への旅から帰ったところです。義理堅い人物で、たくさんのものを持ち帰ってくれましたが、あいにく状態が良くありません」。

サヴァティエと意気投合したクラマーは、日本の内地を頻繁に旅し、多くの標本をもたらしただけでなく、本草家として知られる伊藤圭介とその弟子の田中芳男に引き合わせようとしている。1871(明治4)年5月7日付の書簡によると、サヴァティエはヨーロッパ産植物を日本産植物と交換できないだろうか、と2人に伝えていたことが判る。1ヶ月後の6月5日付の書簡によると、自分の標本の一部を軍艦デュプレクス号に積み込みフランシュに送っていること、友人クラマーに日

本産ユリのコレクションをパリへ直接送るよう依頼していたことが判る。さらに、同年11月25日付の書簡から、クラマーの荷物のなかに、当時稀少種と目されていたユリとベニスジの球根が2つ含まれていたことも判る。

田中芳男・伊藤圭介・小野職愨との交流

クラマーの仲介が不首尾に終わったからといって、日本人本草家たちとの交流を諦めたわけではない。その橋渡しを務めたのは、全権公使レオン・ロッシュやパリ外国宣教会元神父エマニュエル・メルメ＝カション(1828-1889)と交流のあった、新仏派の元幕臣で、医官にして本草家の栗本鋤雲(1822-1897)であった。1871(明治4)年12月の初め、サヴァティエの許に栗本鋤雲がやって来て、植物学の仕事の手伝いを申し出た。政治に忙殺され、植物学を満足におこなえなかったことを

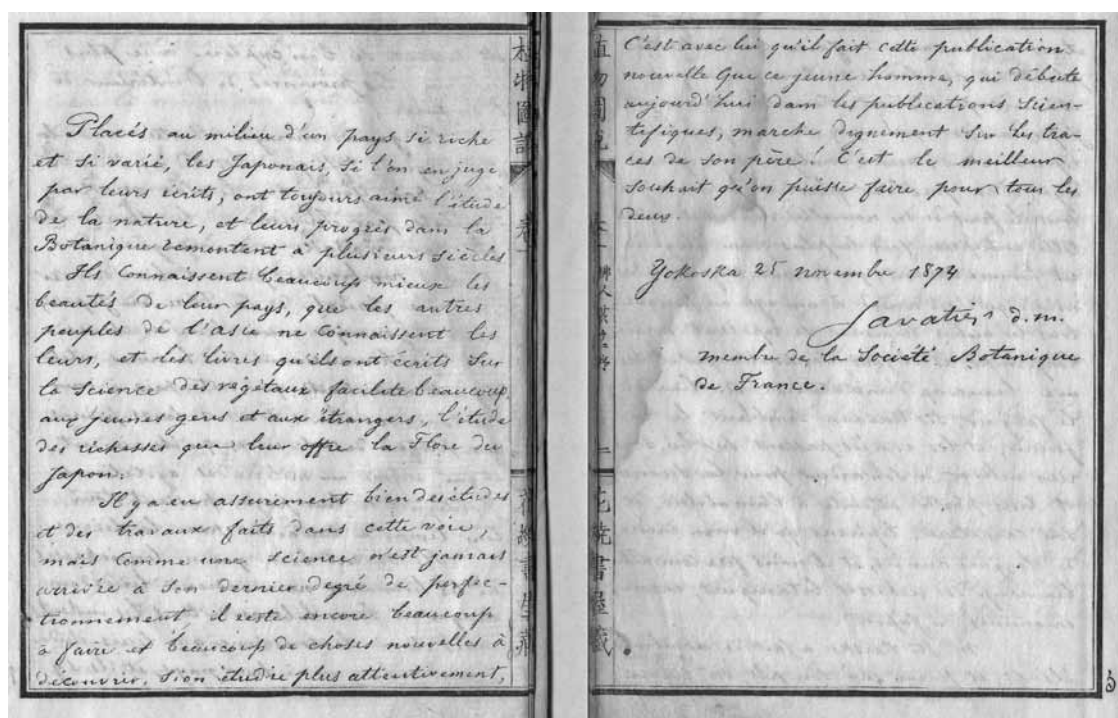


Fig. 4. Preface pages of Nihon-Shokubutsu-Zusetsu, coll. Koishikawa Botanical Garden, the University of Tokyo.

悔やんでいた栗本は、伊藤圭介と田中芳男の2人を説き伏せ、サヴァティエに協力するよう仕向けたのである。このことが同年12月8日付の書簡でフランシェに語られている。

田中芳男は、当時、文部省博物館に出仕していた。2週間後の12月23日付書簡のなかで、サヴァティエは「年のころが30くらいの青年」田中と65歳の伊藤に会ったときのことを書いている、「江戸に参りました。（中略）伊藤圭介、田中芳男に会いました。両人は植物学を、日本流に知ってはいませんが、それ以上のことは、ほとんど知らないようです。彼等は優れた収集家です。わたしは自分の時間の一部を割いて、多くの種の同定をしてやりました。（中略）しまいに伊藤は、日本産植物について学名と和名を掲げた目録のようなものを作れないだろうか、と言い出しました。西洋の本で、和名が判らないのでは、こまるから」。そのときの「もう年も年だから、本を作るなら、あまり時間がかからないように」との伊藤の発言を承け、1875（明治8）年、息子伊藤謙の編で出版された伊藤圭介著作『日本植物図説』草部（イ）初編（Fig. 3）に、サヴァティエの序文（Fig. 4）が

日仏併記で付されたばかりか、和名の傍らにラテン語洋名が付されたことは周知の通りである⁽⁹⁾。

初めての出会いから1ヶ月ほど経った1872年1月23日付の書簡のなかで、サヴァティエは田中と親交を結べたことを手放しで喜んでいる、「一大事件です。丁寧にこしらえた植物標本のたくさん入った包みを田中が持ってきてくれました。それらの植物のうち70種から75種くらいは、確認したところ、まだ収集し切れていなかったものでした」。そのことに驚いたサヴァティエは、飯沼慾齋（1782–1865）が日本産植物を初めてリンネ分類法にしたがって体系化し、1856（安政3）年から1862（文久2）年にかけて出版した『草木図説』全20巻を持ち出してきた。未収集のものに丸の印がつけてあったからである。それを見た田中は、自分が集めてあげると約束したという。「田中は、一緒に一日を過ごしたいと言ってやってきたのです。こちらの歓待振りにも満足したようで、フランスに戻ったらしてもらえないだろうか、と仕事をいくつか頼まれました。ですから、貴兄にもお手伝い頂きたいと思います。田中と一緒に様々なものを調べました。手許にあった全20巻

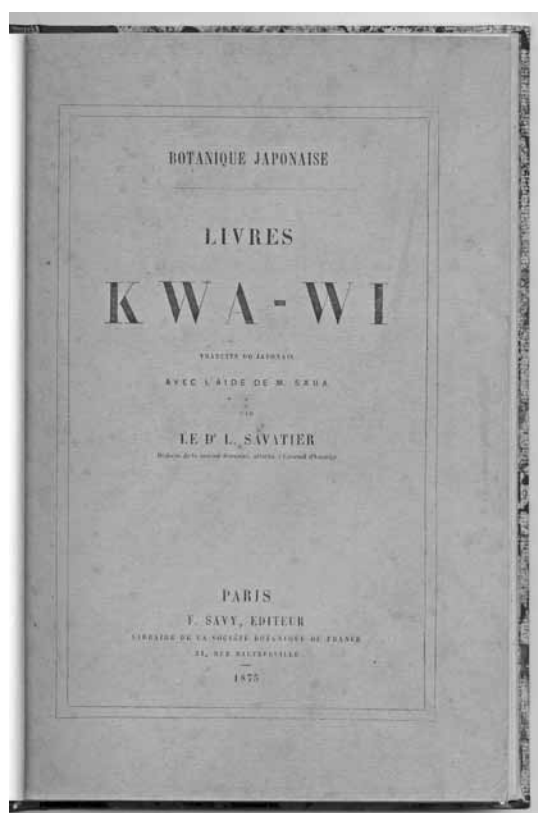


Fig. 5. Cover of Livres KWA-WI, Paris, 1873, coll. K. Polak.

の和書を見せたところ、その著者は彼を本草学に導いた最初の師なのだそうです。本にはまだ集め切れていない種に印が付けてあったのです。彼はその本を江戸に持ってきてはもらえないかと言いました。そうすれば、自分の手許にある種を、すべて送って差し上げるといいます。というわけで、それを待っているところです。彼は夏を九州で過ごすことになっておりますから、わたしのために採集をして差し上げましょうとまで言ってくれました。この取り引きは悪くありません。(中略) 貴兄がこれから受け取られる新種に、ぜひ彼の名前を付けて頂けたらと思います。彼にそのことを約束したところ、大いに気を良くしたようです」。

34歳の田中の反応と好対照をなしていたのが、年輩の伊藤圭介の対応であった。栗本鋤雲がサヴァティエ紹介の労を取ろうと言っても、容易に首肯しなかったとフランシェ宛の書簡にあるからである。伊藤はサヴァティエに初めて会ったとき、なにゆえそれまで会いたくないと言い続けてきた

のか、その訳を説明している。1873(明治6)年5月27日付書簡によると、それは、持って行かれるのではないか、というシーボルトに植え付けられた恐怖感のせいであったという、「日本人からはなにも引き出せません。わたしにそれがやりおおせるでしょうか。伊藤圭介翁とは一週間ほど一緒に過ごす必要があると思います。彼は自分の植物標本を見せるにも、疑心暗鬼になっています。なぜなら当人曰く、シーボルトに標本を見せたら、なにからなにまで持って行かれてしまった、というからです。それ以来、伊藤はいつも怯えているのです」。外国人は自分たちが苦勞して集めたものを奪い取っていくというのが、伊藤の言い分であった。おそらくシーボルトの時代から、そうした事例は枚挙に暇のないほどあったに相違ない。思えば、外科の蘭方医三宅良齋(1817-1868)もまた、手塩に掛けた日本産鉱物標本コレクションを、シーボルトに持ち去られていた(西野2009)。もっとも、サヴァティエは前時代の外国人と違っていた。なぜなら、日本人から標本を貰い受けるだけでなく、パリのフランシェに仲介を頼み、ヨーロッパ産植物の標本300点を日本に取り寄せ、それらを伊藤に贈っていたからである⁽¹⁰⁾。

田中、伊藤とともに、新たな友として迎えられた本草家小野職愨(1838-1890)は、フランスから届けられた植物種子の大部分を受け取る代わりに、文部省管理下の標本を閲覧できるよう、各界に働きかけることで便宜を図ってくれたと、1873(明治6)年2月21日付の書簡にある。東京への旅から戻ったサヴァティエは、満たされた心境を1ヶ月後の3月17日付の書簡で吐露している。「これまでの人生のなかで、この2週間ほど、日本の植物のためだけに多くの時間を割いたことは、一度もありませんでした。(中略) 満足です。まず、江戸に行きました。クラマーからかなり多くの種を渡されました。『ソウモク(草木)』(日本産植物に関する書物のことで、入手は容易ではありません)に携わっている日本人植物学者たちとも会いました。彼らは4日ほど前から、ここ、横須賀に来ています。一日8時間も拘束し、『参った』と根を上げるまで、植物標本に取り組んでもらっています。ラテン語名のわからないソウモク種を、持ち寄ってもらい、わたしがまだ手にしていないものをすべて、丁寧に標本帖に収めました。(もちろん、彼らの了解を得ての話ですが)。でも、もっと素晴らしい出来事は、日本の内地を2ヵ月

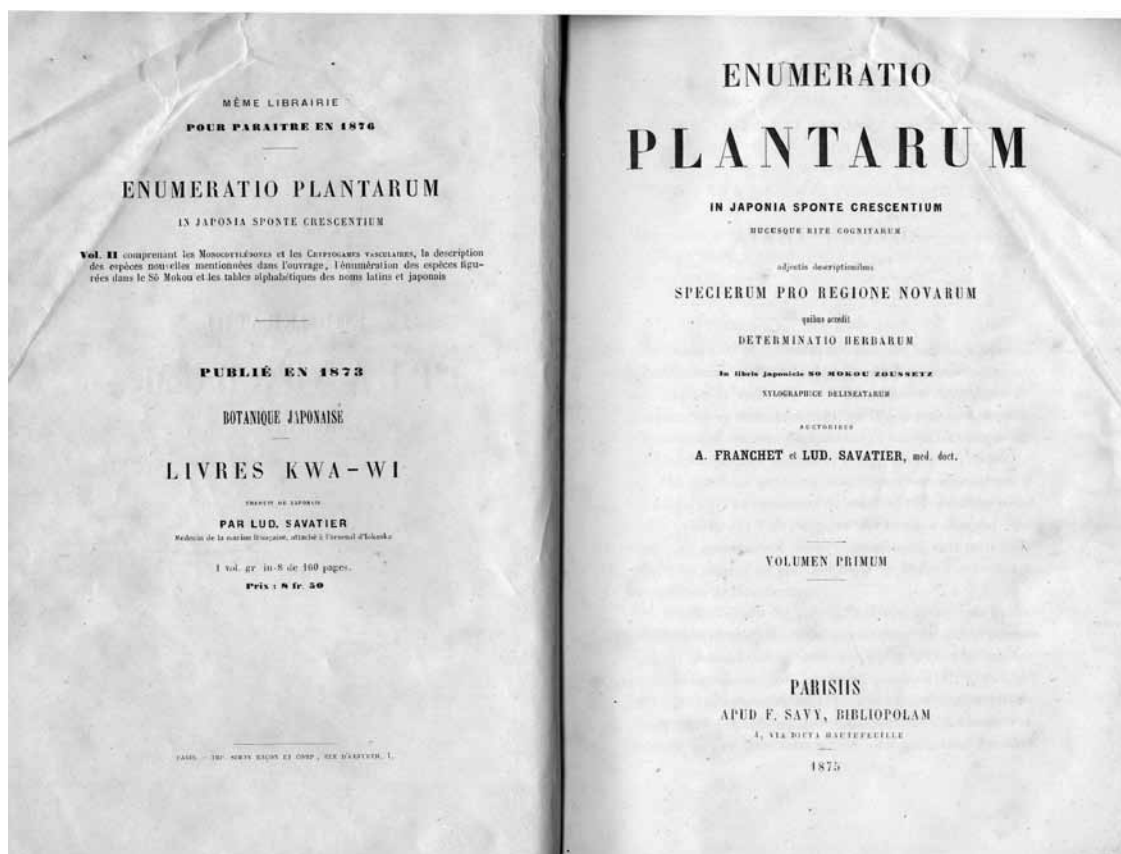


Fig. 6. Title pages of *Enumeratio Plantarum in Japonia*, t.1, Paris, 1875, coll. K. Polak.

半かけて旅した一人の実直なドイツ人と一緒に、江戸に入れたことです。彼は江戸から京都まで歩いて旅し、琵琶湖も渡ったそうです。(中略)道中、朋友のド・ブラントの奨めに応じ、自分用の植物少々と、大部分はわたしのために、植物の採集をしてくれたのです⁽¹¹⁾。

1873(明治6)年夏には、日光とその周辺を巡る二週間の旅に出かけ、「大量の、しかもかなりの数の種を収穫」している⁽¹²⁾。こうして、サヴァティエは「530種、2000点以上の植物標本の包み」を新たにパリのフランシェに送ることができ、フランシェはその返礼として、フランス産をはじめとするヨーロッパ産の植物を横須賀のサヴァティエの許に届けさせていたことが、10日程後の8月25日付の書簡から判る。サヴァティエは日本人本草家たちとの標本交換を促進すべく、ヨーロッパ産植物を、小野職慾に250種、伊藤圭介に100種ほど贈っている⁽¹³⁾。小野はその御

礼として、2ヵ月後に植物200点とシダ50点を、そして1874(明治7)年10月に日光産の植物を複数種、それぞれ送り届けた⁽¹⁴⁾。サヴァティエに標本を送ったのは、もちろん、小野ばかりではなかった。当時、一般の立ち入りが許されていなかった蝦夷(北海道)産の植物をいくつか提供してくれた者もいたからである⁽¹⁵⁾。

出版事業

サヴァティエは植物の収集だけでなく、本草学書のフランス語訳本またはラテン語訳本のシリーズを刊行し、日本産植物をヨーロッパに知らしめようとしている。まず最初に取り組んだのは、小野蘭山(1729–1810)と、「雍南田充房」こと島田充房(1751–1772頃活動)が編纂し、1759(宝暦9)年に出版した本草学書『花彙』であった。1871(明治4)年12月8日付書簡には次のようにある、「あの有名な『花彙』を持っています。草部4巻、

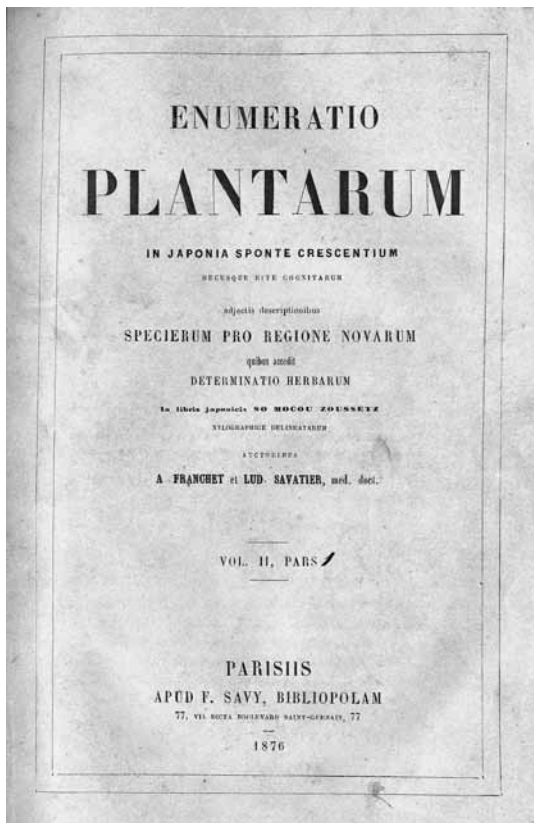


Fig. 7. Cover of *Enumeratio Plantarum in Japonia*, t. 2, Paris, 1876, coll. K. Polak..

木部4巻の全8巻です。当地ではこれをカイと発音しますから、本の名を言っても、まったく判ってもらえません。すべての和名をローマ字で表記し、弟子の一人〔佐波一郎〕の助けを借りながら、翻訳を始めました。最後までこぎつける時間が、はたしてあるのかどうか。草の図版が100枚、木の図版が100枚ありますが、手許になかったのは50種ほどに過ぎませんでした。サヴァティエは、アドルフ・フランソワ・ウジェーヌ・デュボン(1840–1907)⁽¹⁶⁾の随員として働いていた佐波一郎の助けを借りて仏訳し、1873(明治6)年に上巻(Savatier 1873)のみであったが、パリで出版にこぎ着けている(Fig. 5)⁽¹⁷⁾。版元はオートフイユ街34番地にあり、フランス植物学会の書籍を取り扱っていたフランソワ・サヴィ書店であった。図版200点掲載の第2巻の刊行が予告されていたが、それが出版された形跡は見当たらない。いずれにせよ、この、ヨーロッパに初めて紹介さ

れた日本本草学の訳書は、西洋の学者はもとより、日本の学者たちからも最大級の敬意をもって迎えられた。

サヴァティエとフランシェの共同研究の成果は、1871(明治4)年のサヴァティエの一時帰国を経て、1875(明治8)年に2人の共著作『エニュメラチオ・プランタルム(日本産植物目録)』第1巻(Fig. 6)(Franchet and Savatier 1875)として、『花彙』の出版を手がけたサヴィ書店から出版されている。同書の序文には1872(明治5)年の日付があり、フランシェとサヴァティエの連名になっている。サヴァティエは6年間の日本勤務ののち、家族とともに1872(明治5)年3月フランスに帰国し、ほぼ一年近い休暇を過ごしている。とすれば、序文はその間に起草されたのであろう。興味深いのは、その序文のなかに、日本人の熊谷直孝(1850–1942)から和名の読み方などについて協力を仰いだとあることである。熊谷は栗本鋤雲の甥にあたり、横浜の仏語修練所でフランス語を修め、沼津兵学校で教鞭を執ったのち、横須賀に派遣となった。熊谷については、幸いなことに、クリスティアン・ボラック所蔵のレオン・ヴェルニー宛書簡20通の写しから、横須賀の理工学校に学んだ学生であり、ヴェルニーがフランスの技術を学ばせるため、休暇で帰国するサヴァティエとその家族の同伴者としてパリに派遣した人物であることが判っている⁽¹⁸⁾。熊谷がヴェルニーに宛た第一書簡のなかにサヴァティエの名前が登場する。栗本とサヴァティエが交友関係にあったことから、前者の甥の熊谷はサヴァティエの仕事の協力者となったのであろう。*Enumeratio Plantarum* 下巻(Fig. 7)が刊行されたのは翌年のことであった。サン＝ジェルマン大通り77番地に移転した上記書店から、下巻が晴れて出版の運びとなったことで、サヴァティエによる日本産植物研究は一応の完結を見ることになった。

この目録の出版にあたって、サヴァティエは日本の本草学者の著作を縦横に活用している。フランシェ宛の書簡によると、サヴァティエは滞日中に、上述の『花彙』のほか、1828(文政11)年に刊行され、日本で最初の植物図譜として知られることになった岩崎灌園著『本草図譜』全10巻、先述の飯沼慾齋著『草木図説』全20巻など、主要な本草図譜を入手し、標本収集の手引きに活用すると同時に、*Enumeratio Plantarum*の記載に用いていた。田中芳男の依頼でサヴァティエは、



Fig. 8. Cover and first leaf dedicated by K. Ito of *Enumeratio Plantarum in Japonia*, t. 1, Paris, 1875, Former library of L. Savatier, coll. K. Polak.

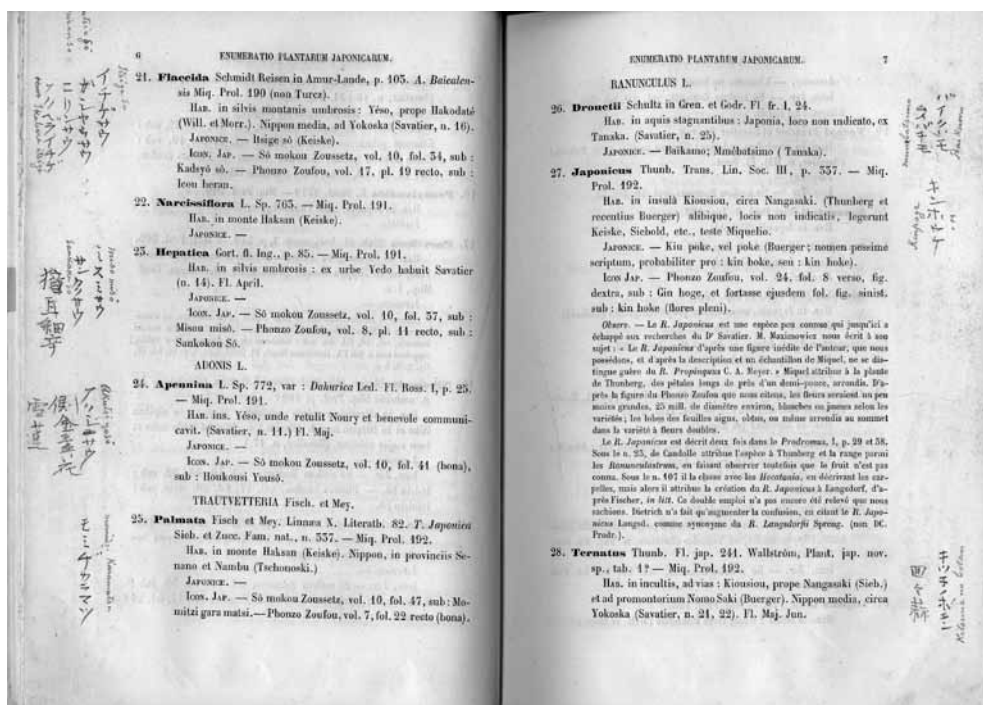


Fig. 9. *Enumeratio Plantarum in Japonia* of pp.7–8 annotated by K. Ito, t.1, Paris, 1875, Former library of L. Savatier, coll. K. Polak..

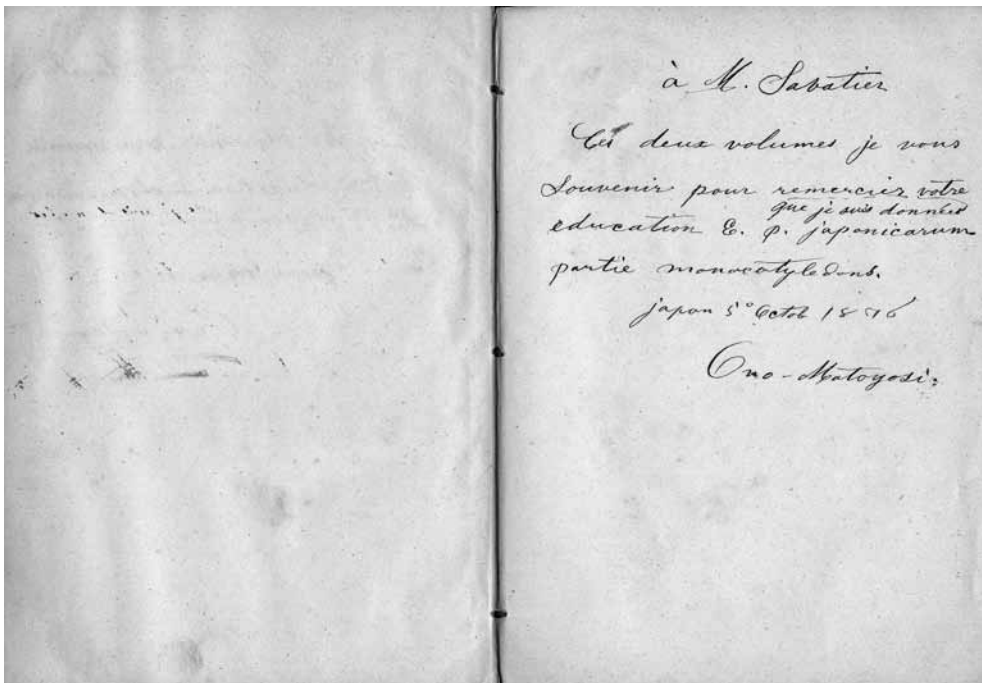


Fig. 10. First leaf with a dedication of M. Ono of the *Sobu-Mokuroku*, Tokyo, 1875, Former library of L. Savatier, coll. K. Polak.

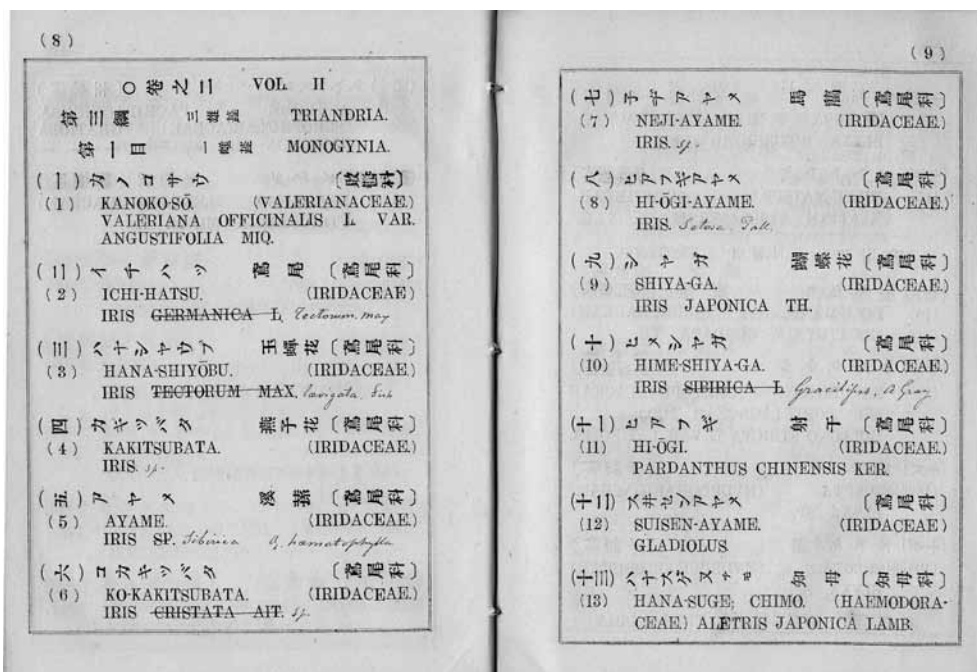


Fig. 11. Annotation by M. Ono on pp. 8-9 of the *Sobu-Mokuroku*, Tokyo, 1875, Former library of L. Savatier, coll. K. Polak.

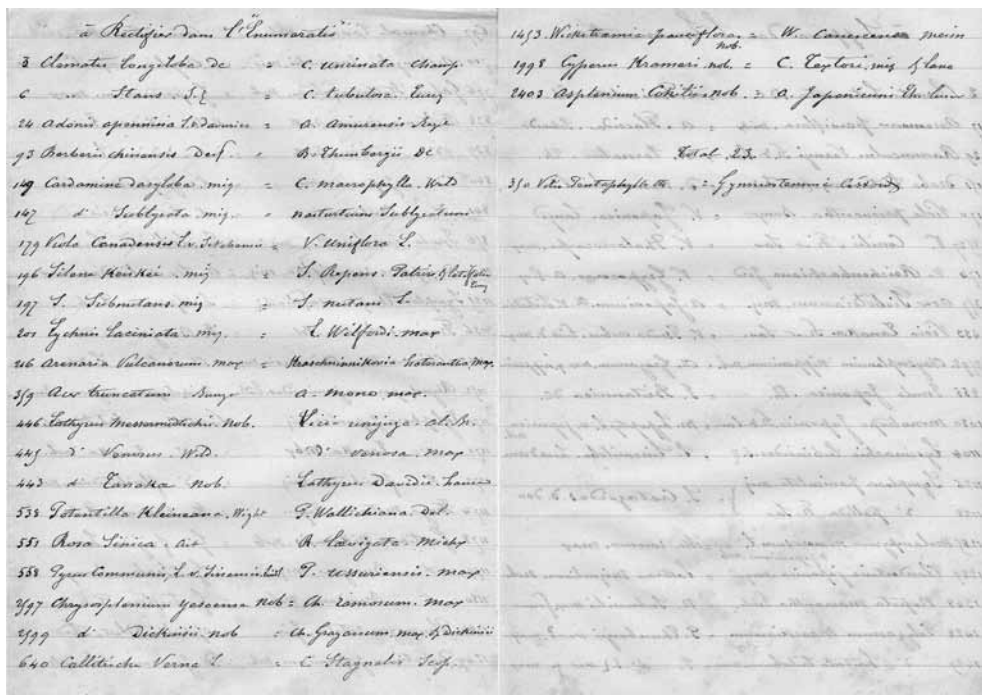


Fig. 13. Note inserted in *Enumeratio Plantarum in Japonia*, t. 2, Paris, 1876, Former library of L. Savatier, coll. K. Polak.

の植物名 1699 件内の 1087 件に、やはり伊藤の手で和名が記入されている (Fig. 9)。伊藤の書き入れには、漢字名とカタカナ名の両方の場合、あるいはカタカナ名だけの場合の 2 種があり、またそれとは別に、伊藤の手と明らかに異なる筆跡で、それらの発音がローマ字で添え書きされている。この間の経緯については、次のような推察が可能である。パリで上巻が出版されたのは 1875 (明治 8) 年のことであり、サヴァティエはいまだ横須賀に駐留していた。したがって、刷り上がったものがフランシェから日本に発送され、それがサヴァティエの落掌するところのものとなった。サヴァティエはそれを伊藤に手渡し、和名との対照を依頼した。伊藤は和名の書き入れ作業を 1876 (明治 9) 年 1 月に終え、本の仮扉に「伊藤圭介 Ito Keisuke. 記」の署名を施し、サヴァティエに返した。サヴァティエは同年 12 月、家族とともに帰国することになるが、パリではフランシェがすでに目録の下巻の出版を終えていた。そのため、伊藤も下巻については、和名について校閲の機会を持ち得なかったことになる。

帰国にさいし、サヴァティエが手にしていた植

物学関係資料のなかには、伊藤の書き込みのある上掲上巻のほかに、1875 (明治 8) 年 7 月、飯沼慾齋著『草木図説』草部 20 冊を再版するさい、すでに同書を所蔵する人々の便宜を考え、ラテン語洋名と「自然文科ノ目」をだき併せ、『草部目録』の表題で「博物科」から出版された小冊子二冊が含まれていた。サヴァティエは、帰国後、それらを四六判背革装に合本させ、自らの蔵書の列に加えている。この本は、フランスに発つ前に小野職愨から贈られたものであることが、見返しにある仏語為書から判る (Fig. 10)。献辞は次の通り、「サヴァティエ氏へ。これらの両巻を、*Enumeratio Plantarum* 日本部で貴殿より賜った単子葉植物の部分についての教育に感謝申し上げる、記念として。日本、1876 年 10 月 5 日、小野職愨⁽²⁰⁾。拙いフランス語であったが、しかし、植物の学名について小野はすでにかかなりの知識を蓄積していた。小野はサヴァティエに贈った上掲書中の、実に多くの項目の洋名について、自らの手で訂正を施しているからである (Fig. 11)。

フランスに帰国したサヴァティエを待っていたのは、目録の下巻であった。遺族の許に残された

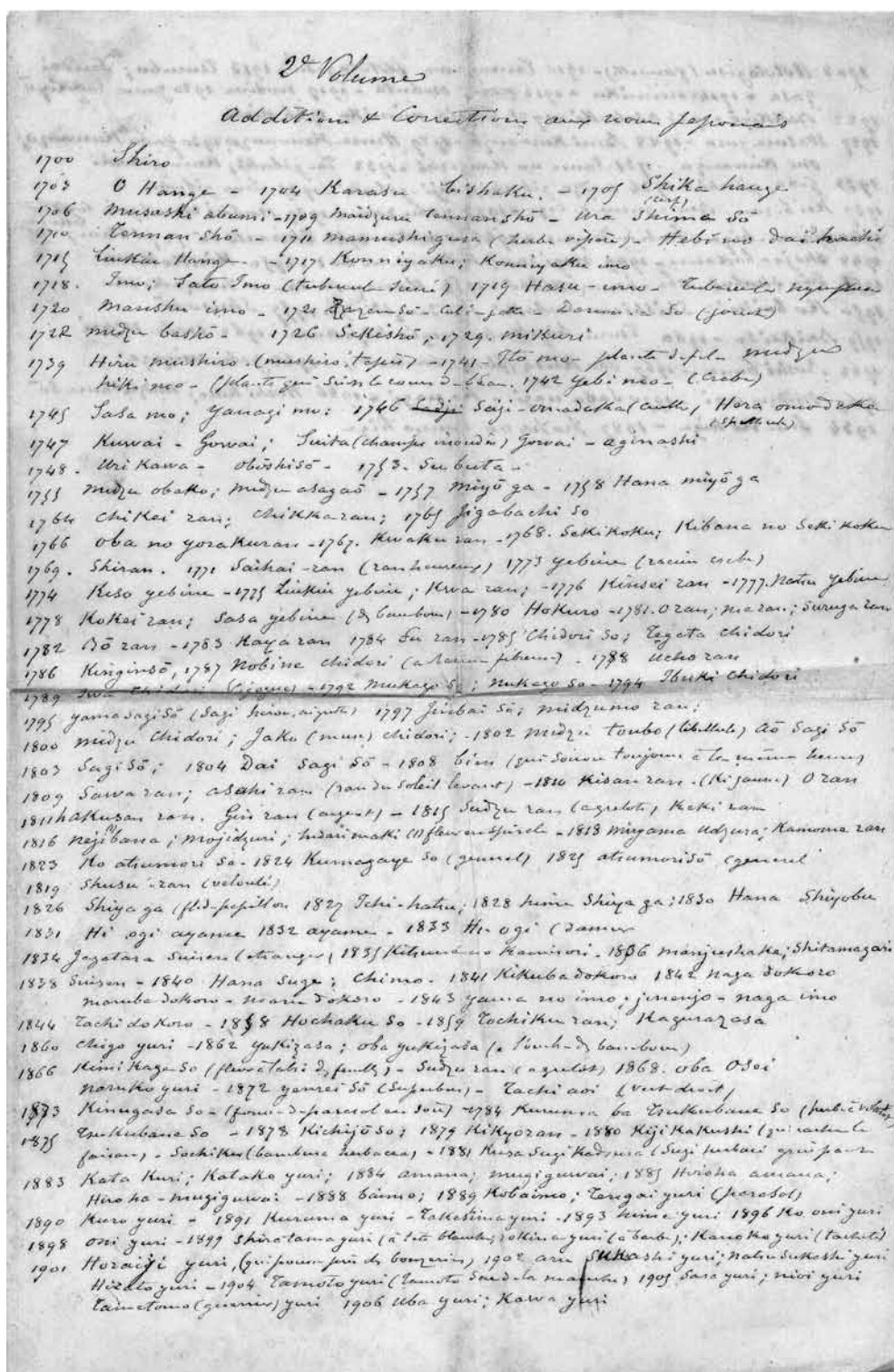


Fig. 14. Note inserted in *Enumeratio Plantarum in Japonia*, t. 2, Paris, 1876, Former library of L. Savatier, coll. K. Polak.

同書には、上巻のリストから抹消し、別の名前に修正すべき24項目の一覧 (Fig. 12)⁽²¹⁾、同じく訂正を要するもの53項目の一覧 (Fig. 13)⁽²²⁾、さらには下巻での和名に対し、追加ないし訂正すべき60項目のリスト (Fig. 14)⁽²³⁾を、輸入用箋に欧文の精細な文字で記した手書きのメモが挿入されている。これら手書きメモが、同一人によって記されたものであることは疑いを容れないが、サヴァティエのそれとも、フランシェのそれとも、また、伊藤や小野のそれとも異なっている。上段で紹介したヴェルニー宛書簡の筆跡と酷似していることから、場合によると、序文に協力者として掲げられた熊谷直孝が記したものかもしれない⁽²⁴⁾。いずれにせよ、明白なことは、下巻の和名についても、邦人植物学者の誰かが学術的な修訂作業をする機会があったということである。もっとも、*Enumeratio Plantarum* は再版されることがなかった。そのため、その修訂作業が公刊物で生かされる機会はなかったわけであるが。

1875 (明治8) 年8月、サヴァティエは、翌年1月18日横浜発の船で帰国することをフランシェに早々と予告し、その言葉通り、家族を連れ、1876 (明治9) 年2月22日マルセイユに無事帰還した。植物学者としての、日本での仕事は10年以上に及び、その間に同定し、分類し、標本集に収録した日本産植物はおおよそ1800種に及び、それらの内の100種以上が新種であった。アブラシバ *Carex satsumensis* Franch. & Sav., シロヨメナ *Aster leiophyllus* Franch. & Sav., タチクラムゴケ *Selaginella nipponica* Franch. & Sav., ミヤマフユイチゴ *Rubus hakonensis* Franch. & Sav. 等は、その好例である。標本集のもとになった2万点超の標本は、台紙貼りの標本ないし図譜1800点とともに、パリ国立自然史博物館の所蔵する42000点のうちで、もっとも保存状態の良いものに数えられている。

本稿の執筆にあたっては、ミシェル・サヴァティエ氏、ラ・ロシェル市立自然史博物館附属科学図書館のシャンタル・ド・ゲ女史、日仏薬学会会長竹中祐典教授、翻訳家石井朱美の各氏からご協力を頂いた。ここに改めて記して御礼申し上げたい。

引用文献

Franchet A. and Savatier L. 1875. *Enumeratio*

Plantarum in Japonia sponte crescentium hucusque rite cognitarum adjectis descriptionibus Specierum pro Regione Novarum quibus accedit Determinatio Herbarum in libris japonicis SOMOKOU ZOUSSETZ xylographice delineatarum, volumen Primum. Parisiis, Apud. F. Savy, Bibliopolam.

今井忠宗 1917. 植物家佛醫サヴァチエ氏の事蹟. 植物研究雑誌 1: 217-221.

今井忠宗 1920. 植物家佛醫サヴァチエ氏の事蹟補遺. 植物研究雑誌 2: 69-76. 西野嘉章 2009. 三宅・田中・サヴァティエ — 東京大学コレクションを中心に. 西野嘉章, クリスティアン・ポラック (編) 維新とフランス — 日仏学術交流の黎明. p. 18. 東京大学出版会, 東京.

西野嘉章 2009. 三宅・田中・サヴァティエ — 東京大学コレクションを中心に. 西野嘉章, クリスティアン・ポラック (編) 維新とフランス — 日仏学術交流の黎明. p. 18. 東京大学出版会, 東京.

西野嘉章, クリスティアン・ポラック (編) 2009. 維新とフランス — 日仏学術交流の黎明. 東京大学出版会, 東京.

大場秀章 1996. 黎明期の日本植物研究. 日本植物研究の歴史 — 小石川植物園三〇〇年の歩み. pp. 67-83. 東京大学出版会, 東京.

大場秀章 2000. ハーバリウム及び黎明期の日本植物研究の歴史. シーボルト日本植物コレクション. pp. 41-57. 東京大学総合研究博物館, 東京.

Raoulx J. 1938. Les Français au Japon: La creation de l'arsenal de Yokoska. Revue Maritime.

Savatier M. 2010. L'Oeillet d'Oleron, Le lys du Japon: Les Savatier Marins et botanistes. Saintes, Le Croit Vif.

Savatier L. 1873. Livres KWA-WI. Paris, Ed. Savy.

註

(1) Documents côtes 4F2/15 et E1724, Archives du Service historique de la Marine à Rochefort. この個人功績録の存在は、ミシェル・サヴァティエ氏のご教授による。

(2) サヴァティエは、ジュリエ艦長率いる蒸気哨戒船タンクレード号の乗組員76名の一員として、1863 (文久3) 年5月初め、横浜に来ている。年俸5000ドルの俸給は、首長フランソワ・レオンス・ヴェルニー (1837-1908) の年俸10000ドルに次ぐもので、下級工員のそれが100ドル内外であったことから考えると破格の好待遇であった。

(3) パリ自然史博物館学芸員であったアドリアン・ルネ・フランシェは、クール・シュヴェルニーの城館主で、博物学者であったヴィブレイ公爵の協力者でもあった。

(4) サヴァティエは、鳥、昆虫、現生貝、化石貝、石器時代の打製や磨製の武器や道具の収集とも積極的に取り組んでいる。それらの収集はすべて、パリ国立自然史博物館のためになされた。1877 (明治10) 年に同館の通信会員の称号を得ている。

- (5) 後年、同じ場所から発掘されたゾウ化石が「ナウマンゾウ」と同定されたことは周知の通りであり、サヴァティエの発掘収集はそれを先駆けるものであった。
- (6) フランソワ・レオンス・ヴェルニーの遺産継承者ジャン・ヴェルニー氏の許に、1869（明治2）年12月10日に順化園の様子を撮影した写真が残されている。
- (7) 原文のスペルのまま、クマガイソウ *Cypripedium japonicum* と呼ばれるもの。
- (8) 横須賀造船所内の教会で司祭を務めていたパリ外国人宣教師会神父マルク・マリ・ド・ロ（1840–1914）もまた、サヴァティエのために植物採集を行っている。
- (9) 伊藤圭介の『日本植物図説』は草部初編のみの1巻に終わったが、植物がイロハ順に並べられているだけでなく、巻末にアルファベット順のラテン語洋名索引を伴う点で、従前のものにない新しさをもっていた。
- (10) 幸いなことに、サヴァティエゆかりの標本は、現在も東京大学総合研究博物館の植物部門に残されている。日本産植物、たとえばイワユキノシタ *Tanakaea radicans* の属名に冠せられた「タナカ」の名とともに、日仏の研究者の実り豊かな交流の証となっている。
- (11) 「ド・プラント」すなわち、1863（文久3）年から1875（明治8）年まで駐日プロシア公使ならびにドイツ公使を務めたマックス・フォン・プラント（1835–1920）は、仏語を良くし、普仏両国の難しい関係にもかかわらず、サヴァティエの研究を助けていた。二人は普仏戦争が1870年に始まる以前から友情の絆で結ばれていたのである。フォン・プラントはサヴァティエに江戸の学校（東京大学の前身）の教師や、日本国内で何度も植物採集をおこなっているライン博士（1874年4月28日付書簡）、およびノイヴェルト（NeewerthあるいはNeuwerth）博士（1874年4月28日付書簡）を紹介している。それら2人のドイツ人もまた、サヴァティエ・コレクションを補完する上で協力的であった。そのほか、サヴァティエの協力者としては、駐日フランス公使として新たに着任した、「鳥や獣にのぼせ上がっている」ジュール・ベルテミー（1828–没年未詳）を挙げることができる（1873年7月14日付書簡）。
- (12) 1873（明治6）年8月12日付フランシェ宛書簡。
- (13) 1873（明治6）年9月21日付フランシェ宛書簡。
- (14) 1873（明治6）年11月10日付と同年12月31日付のフランシェ宛書簡。
- (15) 1874（明治7）年10月付フランシェ宛書簡。
- (16) アドルフ・フランソワ・ウジェーヌ・デュボンは、1861（文久元）年に理工科大学校を卒業し、同年造船工学応用学校に入学。そこでレオンス・ヴェルニーと出会った。1863（文久3）年、ツーロン造船所に就職するや、瞬く間に出世街道を駆け上り、1869（明治2）年ロシュフォール造船所に転属。翌年ツーロンに戻っている。1874（明治7）年レオンス・ヴェルニーによって横須賀に招請され、船材として使用可能な日本産樹木種の目録作成を任じられた。同年9月に来日し、1877（明治10）年9月に離日している。デュボンは日本各地を旅して歩いた数少ない外国人の一人であった。サヴァティエのために植物採集をおこなううち、日本のフローラに開眼し、2冊の本すなわち、『在来並びに外来の樹木』（E. Dupont, *Les Bois Indigenes et Etrangers* 1875）と『日本の森林樹木種』（E. Dupont, *Les Essences* 1880）、さらにはツーロンのマッソーヌ印刷所から小冊子『日本で栽培されているカキに関する覚書』（E. Dupont, *Des Notes relatives aux kakis cultives japonais* 1880）を出版している。日本から持ち帰った竹、銀杏、その他各種の植物を、ツーロン市内の「ブレ・サンダン」（「サンダン家の牧場」の意）に所有する自邸の庭に順化させ、これらは今もおブレ・サンダン公園を美しく飾っている。
- (17) 1874（明治7）年8月24日付フランシェ宛書簡によると、『花彙』の翻訳を手伝った弟子の佐波一郎は、造船所に着任したばかりのフランス人技師アドルフ・フランソワ・ウジェーヌ・デュボンの助手に任ぜられ、造船用木材の調査のため「内地」へ出掛けることになる。サヴァティエはデュボンと佐波の二人に植物学の講義を受け、2人が調査旅行に『花彙』と『日本植物名彙』を携行し、狙いを定めた採集ができるようにしている。『花彙』の仏訳作業は、滞ることなく進み、1872（明治5）年3月に完成している。第1巻は1873（明治6）年にパリで出版されている。
- (18) ヴェルニー宛書簡20通の写しは、クリスティアン・ポラック・コレクションの所蔵になる。ヴェルニーは熊谷直孝をフランスに遣り、1872年10月から翌年1月1日までの3ヶ月間、パリのド・ジュイ街9番地にあった予備学校でアンリ・アランの私塾で基礎教育を受けさせたのち、シェルブールの造船所で学ばせている。なお、日本学者マチュー・フラレイは、熊谷が同い年の河津祐之（1850–1894）と同じ船で初夏に日本を離れたとしているが、根拠は示されていない（cf. Matthew Fraleigh, *New Chronicles of Yanagibashi and Diary of a Journey to the West*, Cornell University, 2010, note. 97, p.198）。サヴァティエについては、ヴェルニー宛第一書簡のなかに言及がある。おそらく、最初はサヴァティエの仕事を手伝い、サヴァティエが1872（明治5）年暮れに日本へ旅立ってからのちは、フランシェの協力者として働いたものと考えられる。熊谷の書簡の多くは、パリの私塾での授業について語っている。そのなかに、当時パリにはすでに60人ほどの日本人留学生がいたとの記述がある。また岩倉使節団についての記述もある。熊谷は造船学教師として1874年に帰国している。
- (19) なお、飯沼慾齋像の石版印刷物は国内最古級のものである。おそらく第二次軍事顧問団がフランスから陸軍士官学校に持ち込んだ印刷機を用いての印刷であったろう。

(20) “A. M. Savatier, Ces deux volumes je vous souvenir pour remercier que suis donnée votre éducation E. P. japonicarum parties monocotyledons, Japon 5 octob. 1876, Ono-Motoyosi.”

(21) “à supprimer dans l’Enumeratio”.

(22) “à rectifier dans l’Enumeratio”.

(23) “2e Volume Addition et Correction aux noms japonais”.

(24) そのほか、サヴァティエ旧蔵書のなかには、1883

(明治16)年に出版された伊藤謙撰、柴田承桂・村井純之助校補による伊藤圭介著『増訂薬品名集』(*A Medicinal Vocabulary in Latin, English and Japanese with Appendixes by Ito Uzuru, Second Edition, Thoroughly revised, with Additions of German by S. Shibata and J. Murai, Tokio, The 16th Year of Meidgi*)が残されている。これには特段の為書もないが、背革装に金箔型押し of 背文字のある製本の仕様は日本で為されたものと考えられる。

新刊

□加藤雅啓・海老原 淳(編): **日本の固有植物**. B5. 503 pp. 2011. ¥3,800 + 税. 東海大学出版会. ISBN 978-4-486-01897-1 C1345.

「本邦固有」という表現は、図鑑や植物誌でよく目にするが、あまり真面目に考えたことはなかった。授業や観察会で「この植物は日本固有種です」としゃべりはするが、絶滅危惧種の候補くらいの認識だった。

2010年に生物多様性条約締結国第10回会議が名古屋で開催され、国際植物保全戦略 GSPC2010 の成果検討と次期目標 GSPC2020 の策定が協議された。その中で、自国の植物相の情報化が基本的要件であることが認識された。国立科学博物館では開館130周年を記念して、2007年に「生物多様性ホットスポットの特定と形成に関する研究」プロジェクトを立ち上げ、同館植物研究部は関連諸機関の協力を得て、ひとまず日本の固有植物のピックアップとそのデータベース作成に取り組んだ。本書はその成果の一部である。絶滅危惧種とは選択基準が異なるから、たとえばヤマツツジは取り込まれているがキレンゲショウマは入っていない。

1. 固有植物の生物学, 2. 日本の固有植物図鑑, 3. 日本固有植物目録, 4. 日本固有植物分布図の四章から成る。口絵には日本の固有科としてシラネアオイ、コウヤマキの2科、固有属としてレンゲショウマ、ヤエヤマヤシなど16属のカラー写真が示されている。

1章では、最近のDNAデータ解析にまでおよぶ植物地理学の動向と成果が、10名の著者によって紹介されており、ここだけでも一読に値する。

2章はわが国固有の維管束植物とコケ植物の簡

単な解説で、代表的なもののカラー写真が頁右端に四・五点ずつ示される。従来日本固有とされてきたが、本書では取り上げられなかった植物については、その理由が述べられている(例アオキ)。

3章は2章で取り上げられた植物の学名・和名のリストである。分類群としては種、亜種、変種のレベルまでで、品種や雑種は対象とされていない。絶滅危惧種については、ランクが示されている。以前、植物研究雑誌79巻2号(2004)で絶滅危惧植物図鑑を紹介したときにも書いたことがあるが、こういうリストでは、autonymの扱いがこれでよいのかと、私には引っかけるところがある。たとえば244頁に *Stachyurus praecox* var. *praecox* キブシとあるが、キブシは *S. praecox* の和名ではないのだろうか? 別な言い方をすれば、*Stachyurus* 属の中の *praecox* という示種名をもつ分類群全体をキブシという和名で呼ぶのではないだろうか? *Stachyurus praecox* var. *praecox* は、*S. praecox* という種の中からあらゆる種内分類群を差し引いた残りを指す名前(いわゆる「狭義のキブシ」)なので、*S. praecox* とは同じものではないし、var. *praecox* は *S. praecox* に種内分類群が新設されたり統合されたりするたびに内容が変わる。var. *praecox* にキブシという和名を与えると、*S. praecox* には和名がないことになってしまう。このことは本書について言うわけではないが、命名規約と和名の関係は微妙なので、こういう場合の和名の扱いにも、神経を使う必要があるだろう。

4章は本書で扱われた植物の分布図2,491点が一頁15図ずつ示されている。分布点の単位は標準地域メッシュの二次メッシュ(2.5万図のサイズ)である。産地記録の精度がまちまちなので、この程度にせざるを得なかったという。最後